プラトン『エウテュデモス』における プロトレプティコス・ロゴスとエリスティケー

箕浦　恵了

一

真理を見いだしたいとは少しものぞまず、自己の狡知をたのんで真偽の別なく他者の言葉に反論し、他者と争論して勝つことだけをめざすソフィスト術は反論術（ἀντιλογική τέχνη）とか争論術（ἐριστική τέχνη）とか呼ばれた。これら両者は、それぞれ別の名をもって呼ばれはしたけれども、実質的には同じものであったと思われる。勿論この両者は共にプラトンによってはっきり批判され、否定されたものであった。プラトン壮年期の作品であり、著作時順上『メノン』の次に位置すると考えられる『エウテュデモス』は、人間の魂を転回させ、愛知（ピロソフィア）と徳の気遣いとへ励ますソクラテス的対話、いわゆるプロトレプティコス・ロゴス（二七八e―二八二d、二八八d―二九三a）を中核とし、愛し求めるべき「知」とその「学び」とを問題にする作品であるが、同時にこれはその約半分に及ぶ部分を争論家の論弁、いわゆるエリスティコス・ロゴスに割いている。この対話篇はエリスティコス・ロゴス（E）とプロトレプティコス・ロゴス（P）とが、順次E―P―E―P―Eと交互に続く構成を持ち、フリートレンダーも言うように、[1] ここでは「遊び」と「真面目」とが幾度も互に不離となって溶け合っている喜劇である。しかもきわめてイローニッシュな喜劇である。新しく完成した争論術を携えて華々しく登場した二人のソフィストが繰り広げる論弁は、居合わせた聴衆は勿論のことリュケイオンの柱さえ喝采したかと思うほどの賞賛を得たが、その実これは奇を衒った、論弁のための

論弁に過ぎず、相手を投げ倒しながら自分でも倒れる論弁に過ぎないことが明らかになる。人々の賞賛を博した知者の論弁はその実、空虚であり、それに反して、対話的考究において行き詰った無知の知者ソクラテスの崇高な「真面目」が最後に残る。対話篇の内容を展開しながら、「知」とその「学び」とをめぐってのこの考究に加わることにしよう。

ソクラテスは、少年クレイニアスやその愛者クテシッポスらと共に昨日リュケイオンにおいて争論家の兄弟、エウテュデモスとその兄ディオニュソドロスとを相手におこなった対話を、クリトンに詳しく語って聞かせることになった。

ソクラテスはまず、この二人の兄弟がいかなる人物であるかを語る。キオスの出身らしいこの兄弟は南イタリアのトゥリオイに移住し、かの地を追われてから、すでに長年ここアテナイの辺りで暇つぶししているソフィストである。二人の知恵は驚くべきもので、かれらは全知者であり、全能戦士である。かれらはまず身体によって戦うことができ、その点で最も恐るべき人たちである。かれら二人は自ら武装して戦うことの知者であるのみならず、他人をも、報酬次第で、その知者になすことができるのである。次に裁判所での戦いに関しても、かれら二人は、自ら論争したり、他人に裁判所向きの演説の語り方や書き方を教えることの最強者である。しかるに今かれら二人は格闘技の術知を完成したのである。これまで手がけずに残した戦いを今や二人は仕上げて。すなわち、かれら二人は言葉によって戦うことにかけては、またいかなる論であれその真偽にかかわりなく反駁することにかけては、恐るべき者になっているのである。かれらがそれを仕上げて、恐るべき者になっているその知恵とは「争論術」である。かれらは短時間でそれを他人に教えると言う。自分はその知恵を欲している。クリトンよ、あなたの息子を連れて、あなたも一緒にかれらの許へ通わないか、とソクラテス。クリトンはそれに異存はないが、「しかしかれら両者の知恵とは何か。またわたしたちは何を学ぶことになるのか、わたしにわかるよう説明して下さい」、と問う。そこでソクラテスは昨日の事を語る。

「さる神のみこころによって」(272e) かれはただひとり体育所の着替室に坐っていた。もう立とうと思って、立ち上るとき、「精霊的ないつもの徴」(272e) が現われた。それでまた坐った。しばらくするとエウテュデモスとディオニュソドロスとの二人が体育所へ入って来た。同時に他の大勢の弟子と思われる人たちも。それからクレイニアスも。この少年は見るに美しき善き少年である。そのあと大勢のかれの愛者たち、そしてクテシッポスが来た。この人たちがソクラテスのまわりに集ったとき、エウテュデモスは今

かれら兄弟が携わっている美しい仕事を語った。「徳を、おおソクラテス、わたしたちは手渡すことができると思います、人々のうちで最も美く、最も速く」(273b)、と。だが今かれらはその知識を真実に持っているであろうか。もし二人がその知識を真実に所有しているならば、かれらはその所有ゆえに、かの権力の所有者ペルシャ大王よりもはるかにもっと浄福であると讃えられるのであるが。二人は、自分たちがここに居合わすのはその知恵を見せ、また学びたいと思う者がおれば教えるためにほかならない、と言う。かれらが見せる知恵の力とは何か。かれらは、かれらから学ばなければならないと既に信じている者だけを善くなすのみならず、また徳を学ばれうるものであるとも、或はかれらを徳の教師であるとも全く考えないため、かれらから学ばなければならないとまだ信じていない者をも説得して、善くなすことができる、と言う。そしてその説得はかれらの所有する「同じ術知の仕事」(274e)である、と。「したがってあなたがたは、おおディオニュソドロス、いまの人たちのうちで最も美く愛知と徳の気遣いとへ励ますのでしょうね」(274e-275a)とソクラテスが言うと、ディオニュソドロスは、「わたしたちはそう思っている」、と言った。そこで二人に向ってソクラテスは、「愛知すべきであり、徳を気遣わなければならないとこの若者〔クレイニアス〕を説得してわたしとここに居るすべての者とにねんごろにして下さい」(275a)、と頼む。なぜならソクラテスたちは皆この少年ができるかぎり善き人間になるよう欲しているからである。またかれらは、ひとが自分たちに先んじてこの少年の精神を他の行事に向けかえ、台なしにするのではないかと恐れるからである。エウテュデモスは勇敢にソクラテスの頼みに応じたのであるが、しかしかれら二人のソフィストが実際に語るのは、すべて虚偽論(fallacy)にほかならない。まずエウテュデモスは次のような問から始めた。

二

〔虚偽論1〕　「どちらが学ぶ人か、知者か無知者か」(275d)。クレイニアスが「学ぶ人は知者です」と答えると、エウテュデモスは反駁して言う。あなたたちが教師の許で学んでいたときには、あなたたちは学ぶものをまだ知識していなかったのではないか。然れば学ぶ人は知者ではない。「無知者が学ぶのである」。肯いた若者によく息つく暇も与えず今度はディオニュソドロスが問う。「読み書きの教師が口誦するとき、口誦されたものをいつも学んでいたのは子供たちのうちのどちらか、知者か無知者か」。「知者」、

とクレイニアス。では、「学ぶ人は無知者」という先程の答は正しくない、と再び反駁。

更にエウテュデモスは問う。

〔虚偽論2〕　「学ぶ人たちはどちらのものを学ぶのか、かれらが知識しているものをかそれとも知識していないものをか」（276d）。「学ぶ人たちはかれらが知識していないものを学ぶのです」、と少年が答えると、エウテュデモスは反駁して、かれらは知識しているものを学ぶのである、と言う。なぜなら人が或るものを口誦する場合には、その人はグランマタ〔文字、文書〕を口誦するが、しかるに口誦されたものを学ぶ〔わかる、理解する〕のは、すべての文字を知識している人の方であるからである。

すると再びディオニュソドロスが、エウテュデモスはクレイニアスを欺いているのだと言って、反駁する。「学ぶ」とは、人が学ぶ当のものの「知識を獲得する」ことである。しかるに、「知識している」とは「知識を持っている」ことであり、「知識していない」とは「知識をまだ持っていない」ことである。さて或るものを獲得する人たちは、すでに持っている人たちではなく、持っていない人たちである。したがって学ぶ人たちは獲得する人たちに属するのであり、持っている人々に属するのではない。それゆえ知識していない人たちが学ぶのである。

エウテュデモスはなお三度目クレイニアスを投げ倒そうと、挑みかかろうとしたので、少年を元気づけてソクラテスは言った。二人の客友たちの言葉〔論弁〕は、秘儀の前に行われる歌舞や遊びのようなものであるから、ソフィスト的秘教の最初のものを聴いたのだと思いなさい。なぜならプロディコスの言うように、最初に名辞の正しさを学ばなければならないのであるから。客友たちが示したのはまさしくそのことである。「学ぶ（マンタネイン）」とは人が始め或る事物について何ら知識を持っていないけれども、後にその「知識を獲得する」ことを意味し、また、すでに知識を持っている人がその知識によってその同じ事物を、行なわれるものであれ語られるものであれ、「考究する」ことを、というよりむしろ「理解する」（συνιέναι）ことを意味するのである。このように同じ名辞は反対情態の人たちに、知っている人にも知っていない人にも妥当するのであるが、クレイニアスはこのことに気づかなかったのである。しかし先の二つの論弁は「学知の遊び」（278b）にすぎない。「わたしが遊びだというわけは、たとえ人がかかるものを多く、あるいはすべて学んでも、人は事物がいかにあるかをもっとよく知ることにはならないが、しかるに名辞の相異によって、

足をかけてひっくり返し、人々をからかうことはできるであろうからである。それはちょうど坐ろうとしている人々の椅子を引く輩が、後へ転倒した人を見て喜び笑うのと同じであるのだから」（278b-c）。

二人は先に「励ましの知恵」（278c）を見せると言っていたのであるから、遊びはもうこれだけにして、次には「真面目な事」を、つまりこの若者を励ましながら「どのように知恵と徳とを気遣うべきか」（278d）を見せて下さい、とソクラテスは頼む。そうしてソクラテスはここで、プロトレプティコス・ロゴスをどのようなものと自分は解しているか、またどのようなそれを聴きたいと欲しているか、その範例をエウテュデモスとディオニュソドロスとに示そうとするのである。

三

〔プロトレプティコス・ロゴス、ソクラテスとクレイニアスとの対話〕（278e-282d）　わたしたち人間はすべて「善く行い幸福であること」（εὖ πράττειν）をのぞむ。それをのぞまない人間は一人もいない。では、善く行い幸福であることをのぞむなら、わたしたちはどのようにすれば善く行い幸福であることができるか。多くの善きものをわたしたちが所有すれば、であることは明らかである。善きものらとは、富んでいること、健康であること、美しいこと、その他の身体的な完備であり、また生れの善さ、権力、自国における名誉も善きものである。なおまた、慎慮、正義、勇敢、そして知恵もまた善きものに属する。ところですべての人々が、そして全くつまらぬ人々でさえもが善きものうちの最大のものであると言っているのは「幸運」（ユウテュキア）である。しかし考えてみると、「知恵こそ実は幸運」である。なぜなら吹奏の善行（エウプラギア）〔上首尾、幸福〕については吹奏家たちが最も幸運であり、文字の読み書きの善行については読み書きの教師たちが最も幸運である。海の危険に関しては知恵ある舵手よりももっと幸運な人はいない。出征するときには人は無知な将軍と共にではなく、知恵ある将軍と共に危険や運命を共有したいと思うし、病気のときには無知な医者と共にではなく、知恵ある医者と共に危険に身を晒したいと思うのである。つまり無知者と共によりは知者と共に行う方がより幸運に行うことができると考えるからである。したがって、知恵はあらゆる場合に人が幸運であるようになすのである。なぜなら知恵というものは誤ることなく、正しく行ない、また事をうまく運ぶのが必然だからである。さもなければもはや知恵ではないであろうから。

したがって知恵が具わっておれば、その人はなおその上に幸運を必要とすることは決してないのである。

わたしたちに多くの善きものが具わっておれば、わたしたちは幸福であり、善く行い幸福であろうということが先に同意されたけれども、わたしたちが幸福であるのは、それら具わっている善きものがわたしたちを益する場合にであって、益さない場合にではない。善きものらは、わたしたちのものとしてただ有るだけで、わたしたちがそれらのものを使用しないならば、何ら益さないであろう。例えばわたしたちがただ所有しているだけで、飲んだり食べたりしない飲食物によっては、わたしたちは決して益されない。またすべて制作者たちも、もしかれらのために、各自に自分の仕事の必需品がすべて用意されてはいても、かれらがそれを使用しなければ、制作者が所有すべき一切のものを所有しているからといって、その所有ゆえにかれらは善く行い幸福であるのではないであろう。例えば、すべての道具と充分な木材とを用意してはいても、工作しない大工はその所有から益されることは全然ない。また富やそのほか先に挙げた善きものらも、それらの単なる所有によって人は幸福たりうるのではない。したがって、幸福になりたいと思う者はかかる善きものらをただ単に所有するだけではなく、それらを使用しなければならない。しかも正しく使用しなければならない。何であれものは正しく使用されない場合には悪く、使用されず放置される場合には善くも悪くもないからである。ところで木材に関しての仕事や使用においては、正しい使用をなし遂げるものは大工術の知識にほかならない。道具に関しての仕事においても「正しく」ということをなし遂げるものは知識である。先に挙げた善きものら、すなわち富、健康、美などの使用についても、かかるものらの正しい使用を導き、行為を是正するものは知識である。したがって、知識は人間たちに、あらゆる所有と行為とにおいて、幸運のみならず善行（エウプラギア）〔上首尾、幸福〕をも与える。しかるに知慮と知恵とを欠くならば、他の所有物にははたして何らか益があるであろうか。否。理性を欠き、多くを所有し多くを行う人よりも、理性を持ち、僅かを所有し僅かを行う人の方がむしろ益を享けるのである。さて、より少なく行う人はより少なく誤り、より少なく誤る人は悪く行うことがより少ない。悪く行うことがより少なければその人はより少なく惨めであろう。ところで、人がより少なく行う場合とは、富める場合ではなく貧しい場合であり、強健な場合ではなく病弱な場合であり、有名ではなく無名の場合であり、勇敢で慎慮ある場合ではなく臆

病な場合であり、勤勉ではなく怠けている場合であり、速い場合より遅い場合であり、鋭く視たり聴いたりする場合より鈍く視たり聴いたりする場合である。ゆえに、先に善きものであると語られた富、健康、美、名誉、勇敢などは総じて、本来、自らそれ自体では善きものではなく、そのものらを無知が導くならば、そのものらは悪い指導者に奉仕することができればできるだけ、その反対のものら〔貧、病弱、醜、無名など〕よりもより大なる悪なのである。しかるに知慮と知恵とが導く場合には、それらはより大なる善きものである。しかるに善きものと言われたものもその反対のものも、どちらも、それらは自らそれ自体では何の価値もないのである。したがって次のように結論することができるであろう。

「他のものらは何ひとつ善いものでも悪いものでもないが、これら二つあるもののうち知恵は善いもの、無知は悪いものにほかならないのではないか」(281e)、と。

さて、わたしたちはみな幸福であることを切望しているが、しかるにわたしたちは事物の使用と正しい使用とによって幸福になることが明らかになったのである。しかも正しさと幸運とを提供するものは知識であった。したがって人はみな可能なかぎり知恵ある者になるよう、あらゆる仕方で努めなければならない。父からは財産を引き継ぐよりも、どのようにすれば可能なかぎり知恵ある者になるか、このことをこそ大いに引き継ぐべきだと考え、また後見人からも他の友らからも、愛者だと称する人たちからも、客友からも同市民からもそうすべきであると考え、知恵を分かち与えてくれるよう頼んだり懇願したりして、このことのためにあらゆる人に奉仕し、仕えることは決して恥ずべきことでも非難すべきことでもないのである。知者になることを切望する人が美しい奉仕ならどんな事でも奉仕しようとする場合には。同意するクレイニアスにソクラテスは言う。「もしも、おおクレイニアス、知恵が教えられるものであり、自ずから人間に具わるものでないならばね。なぜならこのことはまだ考究されていないし、わたしとあなたとによってまだ同意されていないのですから」(282c)。ところがクレイニアスは、「わたしにはそれは教えられるものだと思われます」(282c)、と言う。知恵は教えられるものか、それとも教えられないものか、まさしくこのことについては多大の考究を要するが、クレイニアスの答は親切にもわたしをこの考究から放免してくれた、とソクラテスは言う。されば、「知恵は教えられるものであり、有るものらのうちでただそれのみが人間を幸福になし、幸運に

なすとあなたに思われるのであれば、愛知することは必然だとあなたは言うよりほかないでしょうし、また自分でもその事をなそうと思っているのではありませんか」(282c-d)、とソクラテスが問うと、クレイニアスは、「ええまったく、おおソクラテス、できるかぎり」、と答えた。

プロトレプティコス・ロゴスの範例を以上のように示したソクラテスは二人のソフィストに言う。同じこの事をディオニュソドロスとエウテュデモスとは術知をもって行い、わたしたちに見せてください。さもなければ、クレイニアスが自ら獲得すべきはすべての知識なのか、それともそれを取得すれば必ず幸福であり善き人間であるはずの単一の知識が有るのか、そしてその知識とは何かをこの若者に見せて下さい、と。

四

〔虚偽論3〕　ディオニュソドロスは言う。ソクラテスたちはクレイニアスが知恵ある者になることを、遊びではなく真面目に、本当にのぞんでいる。しかるにクレイニアスはまだ知恵ある者ではない。ソクラテスたちは少年が知恵ある者になることをのぞみ、無知な者では有らないことをのぞんでいるのである。するとソクラテスたちはかれが有らない者になり、いま有る者ではもはや有らないことをのぞんでいるのである(283d)。つまりソクラテスたちはクレイニアスが滅亡することを大いにのぞんでいるのである、と。

〔虚偽論4〕　これを聞いて憤慨したクテシッポスは、かかる事を語ったディオニュソドロスは虚言している、と言う。するとエウテュデモスが問う。「かれは虚言することができるとあなたは思うのか」、(283e)、と。もしそうならかれは言葉がそれについてである当のものを語って虚言するのである。しかるにかれが語る当のものは有るものらに属する。すなわちかれは語るとき有るものを語るのである。しかるに有るもの〔存在するもの、真実〕や有るものらを語る人は真実を語るのである。したがってディオニュソドロスは、有るものらを語っているからには、真実を語っており、虚言しているのではない。

〔虚偽論5〕　だがディオニュソドロスは有るもの〔真実〕を語ってはいない、とクテシッポスが主張するのでエウテュデモスは次のように言う。有らないものとはどこにも有らないものである。この有らないものに対して或る事を行うこと(プラッティン)は不可能である。またどこにも有らないものをなす(ポイエイン)〔作る〕ことも不可能である。しかるに語ることは行う

ことであり、行うことはなすことでもあるから、語ることは行いかつなすことである。したがって有らないものを語る〔虚言する〕人はいない（284c）。有らないものをなす〔作る〕ことはできないと同意されたのであるから。

〔虚偽論6〕　ディオニュソドロスは有るものらを或る仕方で語ってはいるが、そのものらがある通りに（ὡς ἔχει）ではない、とクテシッポスが反論したので、ディオニュソドロスは事物をそれがある通りに語ることの不条理を論弁する。善いものは善くあり、悪いものは悪くある。しかるに美而善な人と真実を語る人とは事物をそれがある通りに語る。つまり善い人は悪いものを悪く〔不正に〕語る。

「悪いものをそれがある通りに語る」とは「悪いものは悪い」と語ることでなければならないのに、ディオニュソドロスは「悪いものを（それがある通りに）悪く語る」という意味に解して詭弁を語ろうとしたのである。②

クテシッポスは相変わらず憤慨していて、ディオニュソドロスとの対話が荒々しくなって来たので、ソクラテスは語る。ディオニュソドロスの真意は、邪悪な、無知な人間を亡ぼして有益な知慮ある人間として再び出現させるということだと思われるし、かれが最近発見した術知は人間を邪悪な者から善い者にする術知だと言うことだから、この少年をであれ、わたしをであれ有益な者にして下さるのなら、わたしはわたし自身をこのディオニュソドロスにお任せしようと思う、と。するとクテシッポスも同意し、「わたしは怒っているのではありません。わたしに向って美く語っていないと思われる事に対して、わたしは反論しているのです」、と言った。

〔虚偽論7〕　クテシッポスに対してディオニュソドロスは、反論することは不可能であると言う（285d）。有るものらの各々には言葉〔陳述〕が有る。各々のものが有る通りに〔各々のものが有るということの〕（ὡς ἔστιν ἕκαστον）、有らない通りにではない。有らないものを誰も語らないということは先に（284c）明らかにされたのであるから。したがってわたしたちが同一事物の言葉を語るときには、わたしたちは反論せず同じ事〔有〕を語る。しかるにわたしたち両者が二人とも事物の言葉を語らない場合、また両者がそれぞれ別の事物の別の言葉を語る場合、わたしたちは反論しない。したがっていずれの場合も反論は不可能である。

虚偽論3、4、5、7はエレア学派のパルメニデスの教説に沿って進められて来た論弁である。しかるにその帰結はプロタゴラスの人間尺度論のそれと同じものになった。

クテシッポスは沈黙した。ソクラテスはその論弁に驚いて、ディオニュソドロスに言った。「とにかくこの言葉〔論弁〕を実に多くの人々から、またしばしば聴いて、そのたびわたしは驚いているのです――というのも、プロタゴ

ラスの一派はそれを大いに用いていましたし、もっと昔の人たち〔ヘラクレイトスやエンペドクレスたち〕も。しかしわたしにはいつもなんだか驚くべきものだと思われるのです。他の人々をもまた自分自身をも覆すその言葉は―しかるにその真理をわたしはあなたの許で最も美（よ）く聞糺すだろうと思います」（286c）、と。ソクラテスをいつも驚かせるこの論弁が言わんとする所は、「虚偽を語ることはできない」ということ、また「虚偽を思うこともできない」ということである。虚偽の思いが有らないとすれば、「無知（アマティア）も無知な人間も有らない」（286d）ことになる。これは奇を衒った、論弁のための論弁ではないであろうか。虚言すること、虚偽を思うこと、無知であることができないのであるから、人は或る事を行うとき「誤ることができない」（287a）のであるとは。では二人のソフィストは何の教師として来たのであろうか。かれらは、学びたいと思う人に、誰れよりも最も美（よ）く徳を手渡すと言っていたのではなかったのか。

ディオニュソドロスは、ソクラテスのこの問に答えないで、言う。ソクラテスは老いぼれて、最初にわれわれが言った事をいま想い起こし、いま現に語られている論弁をどう扱ったものかわからないのだ、と。ソクラテスは、「その論弁をどう扱ったものかわたしはわからない」とは、わたしがそれを反駁することができないという意味なのか、他にそのことば（レーマ）は何を考える（ノエイ）〔意味する〕ものか、と訊ねる。ディオニュソドロスはこの問にもまた答えないで、ただソクラテスに答えさせようと問いかける。

〔虚偽論8〕「考えるものらは魂を持って考えるのか、あるいはまた無魂のものらもなのか」（287d）。魂を持ってです。ではあなたは魂を持つことばを知っているのか。否。ではなぜあなたはさっきわたしに、そのことばは何を考えるか、と訊ねたのか。

はたしてソクラテスは誤ったのであろうか。それとも正しく言ったのであろうか。もしソクラテスが誤ったのでなければ、ディオニュソドロスは、たとえ知者ではあっても、反駁しないであろうし、またかれはこの言葉をどう扱ったものかわからないであろう。しかるに、もしソクラテスが誤ったのなら、誤ることはできないと主張したディオニュソドロスは正しく語っていないのである。ソクラテスは二人のソフィストに語る。

「しかるにおおディオニュソドロスとエウテュデモスよ、この言葉〔論弁〕は同じところにとどまっていて、なおも昔と同じように投げ倒しながら自分でも倒れるようです。

ですからこのことを被らないようにすることはあなたがたの術知によってまだ発見されていないのです。なるほど言葉の正確さにかけてはかくも驚くべきものではありますけれども」（288a）。

五

〔プロトレプティコス・ロゴス〕（288d-292e）

エウテュデモスとディオニュソドロスとの二人は、真面目になって知恵を見せることをまだ拒んでいるから、ソクラテスはもう一度道案内をするのが善いと考え、先程のクレイニアスとの対話を続けて、プロトレプティコス・ロゴスの範例を示そうとするのである。

先にソクラテスとクレイニアスとが行なった対話は、愛知すべきである（φιλοσοφητέον）との同意に達した。ところで愛知（ピロソピア）とは知識の獲得（クテーシス）である。だがどのような知識を獲得すれば正しく獲得したことになるのであろうか。わたしたちを利益する知識を、であることは明らかである。かかる知識とは、例えば、歩き回って何処に極く多量の金が埋蔵されているかを識る知識であろうか。否。たとえ骨折りなしに、大地を掘ることもなしに、金がわがものとなっても何の利もないのであり、岩石を金になす〔作る〕知識といえども、それは何ら価値なきものであろう。なぜなら、わたしたちが金を使用すること（χρῆσθαι）を知識していないならば、何の益もないことは明らかであったから。或るものを作る〔なす〕ことを知識していても、その作る〔なす〕ものの使用を知識していない知識・術知は何ら利なきものである。したがって人を不死になす〔作る〕ほどの知識といえども、不死の使用を知識していなければ、何の益もないのである。作る〔なす〕ことと、作る〔なす〕ものの使用を知識することとがそこで一緒に合致している知識がわたしたちには必要なのである。例えば、作る術知たる琴作術と使用の術知たる琴弾術との間には、それらは同じく琴に関する術知ではあっても、多大の相違がある。したがってわたしたちは必ずしも琴作者であること、琴作の知識の持ち主であることを必要としない。笛作術もまた然り。だが言論作りの術知（ロゴポイイケー・テクネー）は、これを獲得すればわたしたちが幸福である筈の術知ではないであろうか。否、とクレイニアスは否定する。かれは、自分たちが作った言論を使用することを知識していない言論作家たちを見知っているからである。言論に関してもまた、作る術知と使用する術知とは別である。言論作家たちは、交わってみれば、この上なき知者であると思われ、かれらの術知そのものは神的で崇高だと思われるけれども、

かれらの術知もまたわたしたちが長らく探究している知識ではないことが明らかになった。では将軍術はどうであろうか。否、とクレイニアスは否定し、次の如く言う。これは人間の狩猟術の如きものである。そもそも狩猟術はどれも狩猟し捕獲する以上には出ない。狩人や漁夫たちは獲物を料理人たちに手渡すのである。また幾何学者たち、天文学者たち、計算家たちも狩猟家である。なぜならかれらはそれぞれ図形を作るのではなく、有るものらを発見するのであるから。かれらは自分ではそれらのものを使用することを知識せず、ただ狩猟するだけである。かれらは自らの発見物を用いるよう対話家たち（ディアレクティコイ）に手渡すのである。将軍たちも、国や陣地を狩猟し、それを政治家たちに手渡すのである。かれらは獲物の使用を知識していないのであるから。更にクレイニアスは言う。「ですから作るなり狩猟するなりして、獲得するものを自らまた使用することをも知識しているあの術知をわたしたちが必要とするのなら、そうしてかかる術知がわたしたちを浄福になすのであるなら、将軍術のかわりに何か他の術知を探究しなければなりません」（290d）、と。

かかることを語ることができたのは、はたして少年クレイニアスであったであろうか。少年クレイニアスではなかったとすれば、かかることを語った非凡な者とは誰れであったのか。

ソクラテスとクレイニアスとは、あの術知を探究して、王の術知（バシリケー・テクネー）に到達し、はたしてその術知は幸福を提供しかつなし遂げるものであるかどうかを考究しながら、そこでちょうどラビリントスに落ち込んだように、ぐるっと回って、探究の始めにもどってしまった。そして最初に探究していたときと全く等しいものが必要であることが明かになった。ソクラテスはクリトンを相手に、昨日クレイニアスと行なった対話を反復する。

王の術知（バシリケー・テクネー）は政治術（ポリティケー・テクネー）と同じものである。他の諸術知はそれらの制作した仕事〔作品〕を支配するよう王の術知に手渡す。この術知だけが使用を知識しているからである。この術知こそは国において正しく行うことの原因であり、アイスキュロスの詩句に従えば、この術知のみ国の船尾に坐り、一切のものを舵とり、一切のものを支配して一切のものを有用になす、と思われる。さて王の術知は一切のものを支配してわたしたちのために或る仕事をなし遂げると思われるが、その仕事とは何か。例えば、医術はそれが支配する一切のものを支配して健康を提供する。同じく農業術は大地からの食糧を。では王の術知は何をなし遂げるか。

もし王の術知こそわたしたちの探究している当の術知にほかならないなら、王の術知は有益なものでなければならない。また王の術知はわたしたちに善いものを手渡すのでなければならない。しかるに善いものは或る知識にほかならない、と先に(281e)同意された。政治術は市民を富裕に、自由に、安らかになすが、富、自由、安らぎはそれ自体では、すでに明らかになったように、善くも悪くもないものである。したがって、もし政治術が人々を益し幸福になすものであるべきならば、それは人々を知恵ある者になし、知識を分かち与えなければならない。しかるに王の術知は人間を知恵ある者になし、善き者になすとしても、それはいったいすべての人をすべての事に関して善くなすのであろうか。それはすべての知識〔例えば靴作り術や大工術などの諸知識〕を手渡すものであろうか。否。そこでソクラテスは問う。

「しかればいったいどんな知識をなのでしょうか。それを何のためにわたしたちは使用するのでしょうか。というのも、それは善くも悪くもない諸仕事のどれひとつの制作者でもあるべきではなく、またそれ自身以外の他の知識をなにひとつ手渡すべきでもないからです。ではそれはいったい何であり、それを何のために使用するのだとわたしたちは言ったものでしょうか。どうでしょうか、わたしたちはこう言ってみては、おおクリトン、よってもってわたしたちが他の人々を善くなす知識であると」(292d)。

その人々はわたしたちにとってどの点で善く、またどの点で有益なのか。かれらは他の人々を善くなし、これら他の人々は更に他の人々を善くなすのであろうか。しかしいったいどの点でかれらは善いのであるか。それはわたしたちに全然明らかではない。政治術の仕事と言われるものら〔富、自由、安らぎ〕をわたしたちは評価しなかったのであるから。わたしたちを幸福になすあの知識がいったい何であるかを知るためには、先程ソクラテスが言っていたように、等しいものが、あるいはなおもっと多くのものがわたしたちには欠けているのである。ソクラテスとクレイニアスとの対話はかかる行き詰りに陥ったので、ソクラテスは二人の客友に助けを求めた。

六

しかしエウテュデモスとディオニュソドロスとはまたも虚偽論を繰り広げるだけであった。

〔虚偽論9〕　もしソクラテスが或る事を知識しているなら、かれは知識している者であるからすべてのものを知

識していることは必然である（293c）。なぜなら有るものらのうちの或るものが、まさしくそれで有るところのそのもの自体で有らないことは不可能だからである（293b, c）。

〔虚偽論10〕 ソクラテスは、かれが知識するすべてのものを常に同じものによって―それが魂であるかどうかをエウテュデモスは問題にしないが―知識する。しかるにソクラテスはすべてのものを知識しているのであるから、ソクラテスは常にすべてのものを知識している（295b-296d）。

〔虚偽論11〕 ソプロニスコスの息子ソクラテスには異父兄弟、パトロクレスが居る。かれの父はカレイデモス。カレイデモスはパトロクレスの父であってソクラテスのではない。すなわちカイレデモスは父であって父とは別者である。したがってまたソプロニスコスも父であっても父ではないから、ソクラテスは父無しである（297e-298b）。

〔虚偽論12〕 同じ人が父であって父ではないことは不可能である。金であって金ではないとか人間であって人間ではないということも考えられないから、エウテュデモスの父は父であるからには、すべての人間の、いや、すべての動物の父でもある（298c, d）。

〔虚偽論13〕 クテシッポスの犬は仔犬の父であるが、その犬は父であってクテシッポスのであるから、犬はかれの父であり、またその仔犬たちはクテシッポスの兄弟である（298e）。

〔虚偽論14〕 誰れも多大の善いものを必要とはしない（299a）。もしそうでないなら、例えば、病気のとき人はできるだけ多くの――車一台分の――薬を飲まなければならないから。

〔虚偽論15〕 人間は見ることのできるものを見る。わたしたちの着物は見ることのできるものである。では、見ることのできる着物は何を見るのか（300a）。

〔虚偽論16〕 沈黙しているものの語りは不可能。語っているものの沈黙は不可能。しかるにあなたは石や木や鉄具を語るとき、沈黙しているものの語りをしている（300b）。ゆえに沈黙しているものの語りは可能である。

〔虚偽論17〕 語っているものの沈黙は可能である（300c）。あなたが沈黙するとき、あなたは一切のものを沈黙するのである。しかるに語っているものは一切のものに属する。したがってあなたは語っているものの沈黙をしているのである。

〔虚偽論18〕 美しいものらは「美」とは別のものである（301a）。しかるに美しいものらの各々には「美」のようなものが居合わせるのである、とソクラテスは言う。だが

このことは否定される。なぜなら、もしそうなら、ソクラテスのところに牛が居合わせるならば、ソクラテスは牛であり、もしディオニュソドロスが居合わせるならば、ソクラテスはディオニュソドロスであるから（301a）。

〔虚偽論19〕　もし人がふさわしい事を行うなら、かれは正しく行うであろう。しかるに料理人には殺したり、切ったり、皮を剝いだり、肉を煮たり焼いたりすることがふさわしい。したがって人が料理人を殺して切ったり、煮たり、焼いたりするなら、その人はふさわしいことをなすであろう（301c, d）。

〔虚偽論20〕　ソクラテスが支配し、のぞむ通りに使用することのできるものはソクラテスのものである。例えばソクラテスは牛や羊を、それがかれのものであれば、売ったり、与えたり、犠牲に奉げたりすることができる。ところで神は魂を持つゆえ生物である。アポロン、ゼウス、アテーナはソクラテスの神々である。その神々はソクラテスのであるから、かれは神々を売ったり、与えたり、他の生物と同じように、のぞむ通りに使用することができる（301e-303a）。

〔虚偽論21〕　「うまい、おおヘラクレスよ」とクテシッポスが感嘆すると、ディオニュソドロスが、「ヘラクレスがうまいのか、うまいがヘラクレスか」（303a）、と言った。

七

エウテュデモスとディオニュソドロスとが行なった論弁はリュケイオンをゆるがす喝采と共に終った。しかしかれらの論弁はいかなるものであったのか。ソクラテスは言う。

「なにものも美しいもの、善いもの、白いもの、またその他かかるもののどれでもなく、一般に別のものらと別ではないとあなたたちが主張するとき、全く本当にあなたたちは人間の口を縫い合わすのですよ、あなたたちも言っておりますように。ですが他人の口ばかりではありません、あなたたち自身の口をもなのです、その点は大いに素敵であり、論弁から憎しみをとり去るのです」（303d, e）、と。

このようにエウテュデモスとディオニュソドロスとの論弁は自己及び他人の口を縫い合わすもの、すなわち自他の否定に終るものであり、したがって「学び」をも否定するものであった。振りかえってみれば、対話の当初からかれらの論弁は、その大半が学びを否定する意味のものであった。すなわち、知者も無知者も学ぶ人ではなく〔虚偽論1〕、また人は知識しているものをも知識していないものをも学ばない③〔虚偽論2〕。少年を知恵ある者になしたいとのぞむ

ことは少年の滅亡をのぞむことである〔虚偽論3〕、というように。更に虚偽論3、4、5、7はエレア学派のパルメニデスの教説に沿って展開された論弁と思われるが、その帰結するところは、ソクラテスが解したように、「虚偽を語ることも思うこともできない」、したがって「無知も無知な人間も有らない」ということである。人は無知であることも、誤ることもできないのであれば、もはや何の学びがあるであろうか。「争論家的言葉（エリスティコス・ロゴス）はわたしたちを無為にするであろう」（*Menon* 81d）。『メノン』においては争論家的言葉による学びの否定は、「魂の不死」と「想起（アナムネーシス）」とがソクラテスによって語られ、それによってのり越えられたのであった。

当編のプロトレプティコス・ロゴスはいわゆるラビリントスの迷路に陥った。その理路は次の通りであった。知恵こそ愛し求められるべきものである。なぜなら、人は誰れしも善く行い幸福であることをのぞむが、そのため人は善きものの所有が必要であると考える。しかるに善きものと考えられたもの—富、健康、美、権力、勇敢など—はその実、それ自体では善くも悪くもないものであり、それらは、それら善きものの一つと考えられた知恵によっての正しい使用と導きとによるのでなければ、善きものとなることはできないからである。したがって知恵こそは善きものであり、求められるべきものである。しかしその知恵・知識とは何か。それはわたしたちを利益する知識である。その利益する知識とは何か。それは或るものを作る〔なす〕ことを知識しているのみならず、その作るものの使用を知識している知識・術知でなければならない。「作ること」と「作るものの使用を知識すること」とが一緒に合致している知識こそ必要である。しかしかかる知識・術知は容易に見い出されなかった。制作者たちは作ったものの使用を他者に委ねる。狩猟家たちも。ソクラテスとクレイニアスとはかかる術知を探究して「王の術知」に到達した。王の術知は一切の支配と使用とを知識する術知であると思われる。しかし王の術知は何をなし遂げるのか。もし王の術知が探究されている当の術知であるなら、王の術知は善きものをわたしたちに手渡すのでなければならない。しかるに善きものはただ知識のみである。王の術知は知識を分かち与え、人間を知恵ある者に、善き者になすのでなければならない。しかしその知識とは何か。それは人々を善くなす知識である。ではそれはどの点で人を善くなす知識であるのか。かく問いながら対話はラビリントスの迷路を回るだけになった。

それではいったい知恵・知識はどのように探究されなければならないのであろうか。先の探究の過程を読み返してみると、知恵は初めに、富、健康、美、権力らと共に善きもののひとつに数えられた（279c）。やがて知恵はその他のいわゆる善きもの―それ自体では善くも悪くもないもの―から区別されたが、そうしてこれのみが真に善きものと考えられたが、この知恵をクレイニアスは何ら考究することなく「教えられるもの」（282c）と考えたのである。この知恵は探究の最後には、王の術知として、「よってもって他の人々を善くなす知識」（292d）と語られたのであった。この場合、医術が健康を、農業術が食糧を人々に提供（パレケイン）するように、王の術知は知識を「分かち与える」（μεταδιδόναι, 292b）ことによって人々を知恵ある者になし、善くなすと考えられたのであるが、「知識」・「知恵」ははたして健康や食糧と同列のものとして、分かち与えられ、教えられるものであろうか。「知恵は教えられるものだと思われます」（282c）というクレイニアスの答のために、遂に考究されることなく省かれてしまった「知恵」とその「学び」とについての「多大の考究」（282c）がやはり必要なのである。行詰りに終ったプロトレプティコス・ロゴスの最後に語られたソクラテスの言葉――「さっきも言っていましたように、わたしたちを幸福になすあの知識がいったい何であるかを知るためには、等しいものが、あるいはなおもっと多くのものがわたしたちには欠けているのです」――は省かれてしまった「多大の考究」へ向うべきことを示唆しているのではないであろうか。「知」とその「学び」とに関する「多大の考究」へ向うとは、自己の内奥に「親（みずか）らの知識」（ἡ οἰκεία ἐπιστήμη, *Phaidon* 75e）を自覚する「想起」（ἀνάμνησις）へ向うことである。「探究も学びも全て想起である」（*Menon* 81d）。

しかるにプロトレプティコス・ロゴスに続くエウテュデモスの虚偽論9、10は想起を語る『メノン』の言葉――「魂は一切のものを学知している」（81d）――とは似て非なる浅薄な虚偽論であった。またディオニュソドロスによる虚偽論18は、「形相」の考えを嘲笑する遊びであった。真の愛知は争論術から峻別されなければならない。真の愛知は対話家たちの知を、王の術知を考究すべき「多大の考究」として更に展開さるべきものであろう。当編を結ぶソクラテスの言葉は次の通りであった。

「事柄そのもの〔愛知〕を美しく善く吟味して、もしそれがつまらぬものだとあなたにわかったら、息子たちだけをではなく、全ての人をひき離しなさい。しかるにもしそれ

がわたしのまさに思っているようなものであることがわかれば、勇んで追い求め修練しなさい。文字通り自分も子供も」（307b, c）。

注

① Friedländer, P., *Platon* Bd II, S. 165.

② ディオニュソドロスはクテシッポスの非難――「かれ（ディオニュソドロス）は有るものらを或る仕方で語ってはいますが、しかしそのものらがある通りにではありません」（284c）――に対して、これを論駁していない。Bonitz, H., *Platonische Studien* 1886, S. 106 参照。

③ プラトン『メノン』参照。「人間にとっては自分が知っている事も知っていない事をも探究することはできない」（*Menon* 80d, e）というメノンの言葉をソクラテスは争論家的言葉だと言っている。

原典解釈には Gifford, E. H., *The Euthydemus of Plato*, 1905.
Hawtrey,R. S. W., *Commentary on Plato's Euthydemus*, 1981.
の注釈書を参照した。

（本学教授　西洋哲学）